まるで子供だった。子供そのものだった。

わたしは首を横に振り、前歯でくちびるを強く噛んだ。視界がうるみ始めた。目の前にあるカズの丸い顔が、水の中で見る顔のようになった。

カズは照れたようにひと声、笑い声をあげ、もとの姿勢に戻った。ワインを飲み、ふうっ、と吐息をつき、あほやな、とだけ言った。

風向きが少し変わったらしい。桜の木の向こうにある屋台から、かすかにおでんの香りが漂ってくる。

わたしは指先でそっと涙を拭い、両手で勢いよく髪の毛を後ろに流した。うなじのあたりをぶるんと震わせ、小さく深呼吸した。

「おでん、食べたくなったな」とわたしは言った。「あそこの屋台、行かない？」

よっしゃ、とカズが背筋をのばして言った。「俺、やっぱ、ワインより焼酎のほうがええわ」

「なら、焼酎、たくさん飲もう」

「相変わらず飲んべえやな。ほんまのザルや」

「そうでもないよ。これでも若いころと比べたら、ずいぶん弱くなったのよ」

「当たり前やろ。もうすぐ五十やで、俺たち」

「でも、わたし、六十になっても飲むよ。七十になっても八十になっても、がんがん飲

むよ」そう言って笑顔を作り、わたしはカズと向き合った。「飲むの、ずっとつきあってよね」

つきあいきれるか、とカズは言い、わたしたちは大声で笑い合った。

カズの分もわたしが会計をすませ、わたしたちは連れ立ってカフェを出た。

ショッピングセンターのショーウィンドウからこぼれてくる、蜂蜜色の光に向かってわたしたちは歩く。空気が少しひんやりとして肌寒い。

桜の木の下に立ち、歩みを止めて空を仰ぐ。花はそれぞれの枝にびっしりと、張りつくようにして咲き誇っている。軽く風が起こるたびに、下枝のあたりから花が揺れ、上へ上へと揺れが伝わって、やがてはらはらと雪のように白いものがやわらかく舞い落ちる。

夜空は黒い天幕のようだ。桜の花の白と、空の黒とが、鮮やかな輪郭を描き、見ているだけでドキドキしてくる。

春は今、爛漫である。胸焦がされるほどに爛漫である。

この世のものは、こんなふうにすべて自分になじんでいるのだ、とわたしは思った。カズや浅丘はもちろんのこと、いろいろとうまくいかない仕事や人間関係にしたって全部、それなりにわたしになじんでいる。手垢のついた家具みたいになっているし、今はそうでないものも、そのうちきっと、そうなっていくに違いないのである。

脱落していた3行

屋台から漂ってくるおでんの香りが、濃厚になってきた。カズがくしゃみをする。
春だね、とわたしが桜を見上げたまま言うと、カズはそれに答えようとして、もう一度、大きなくしゃみをした。